

題目 一般的信頼と機会コストが自集団から出るタイミングに及ぼす効果の検討

氏名 糸瀬日菜

指導教員 高橋伸幸

グローバル化が急速に進行しつつある現代社会では、集団を超えた相互作用の重要性・必要性が高まっているが、これを上手に行うことは簡単ではない。集団内は評判や関係の固定化といった非協力が抑止される仕組みによって社会的不確実性が小さく保たれているのに対し、集団外はそのような仕組みが存在せず、社会的不確実性が大きいからである。しかし集団外には、集団内にとどまっていたは得ることのできない利益（機会コスト）が存在する。グローバル化は機会コストの上昇を伴うため、集団を超えて相互作用する程度に社会差があるとすれば、グローバル化が社会間の格差を生む可能性がある。そこで本研究では、上昇する機会コストに反応し、集団外に出て相互作用する程度に社会差があるかどうか、社会差があるとすればその要因は何かを検討した。先行研究から、外集団の相手に協力する程度には社会差がみられること（Romano et al., 2021）、固定化された関係を離れて新規の他者と相互作用をする程度の社会差は、社会的不確実性と社会差のある心理特性である一般的信頼をコントロールするとみられなくなること（Yamagishi et al., 1998）が示されてきたが、機会コストと集団を超えて相互作用する程度の間の関係については検討されていない。本研究では、集団を超えて相互作用する程度には社会差があり、それは社会差のある心理特性によって説明されるという予測のもと、先行研究から理論的に予測される一般的信頼のほか、リスク回避傾向、ゼロサム信念、集団への帰属意識の効果を探索的に検討した。機会コストを上昇させたとき、どのタイミングで集団内から集団外に出ることを選択するかをみる実験を日本とカナダで実施し、日本のデータを対象に分析を行ったところ、集団外に出るタイミングに影響を与えると考えられる集団内での経験をコントロールしても一般的信頼が外へ出るタイミングを早める効果が一貫して見られた。この結果から、一般的信頼が集団外に出るタイミングに影響を与え、それゆえに社会差が生じることが示唆された。ただし、社会差を生むのは一般的信頼だけであるとまではいえず、他の要因も関わっている可能性は否定できない。これを検討するためには、カナダのデータを分析し、一般的信頼をコントロールしたときに日加差がみられるかどうかを確かめる必要がある。